現代人の「生」

― オルテガ、ピカート、坂田徳男 ―

La vie humaine de notre temps:

ORTEGA, PICARD et Tokuo SAKATA

大町　公*
Isao OMACHI

はじめに

現代人とはいかなる人間なのか。どのように生きているのか。いや、他人事のような言い方はすべきではないだろう。いったいわれわれとは何者なのか。われわれは現にどう生きているのか。

20世紀日本を代表する哲学者の一人坂田徳男（1898～1984）は、およそ40年前、論文「私の回想のうちのベルグソン」の中で、ベルクソン（1859～1941）が実在として捉えた「持続」durée は、現代ではもはや破壊しつくされ、現代の人間の生活のうちに「持続」が見い出されるのは真にまれであるとしたあと、こう続けている。

「人間はとっくの昔に vermassen した（オルテガ）。vermassen した人間はさらに atomisieren して分裂症的に幽霊化してきた（ピカート）。それはもはや人間というものでも、存在者というものでもないのである。突如として現われ、突如として消えうせる Phantom が出没する世界、それが現代なのである。」[1)]

現代人は「大衆化」した上に「アトム化」している。坂田のこの言葉を手がかりに、以下においてまずオルテガ（José Ortega y Gasset, 1883～1955）の「大衆化」を、ついでピカート（Max Picard, 1888～1965）の「アトム化」なる言葉の意味を探り、現代日本人の理解に手がかりを得たい。

あるいは人はオルテガやピカートの名を聞いて、もはや古いなどといった印象を持つかもしれない。しかし、それこそ検討はずれな考えであろう。オルテガやピカート以後に現れた者で、彼らの意見を無効にするような、そんな＜新しい＞思想が生まれただろうか。今や彼ら２人の警告、予言なるものが的中し、そういう事態があまねく顕在化しているのではないか。現代人が Phantom であるという坂田の言葉にも誇張はあるまい。

平成12年９月８日原稿受理　*教養部

以下、オルテガでは『大衆の反逆』、ピカートでは『われわれ自身のなかのヒトラー』、『騒音とアトム化の世界』、坂田については『近代と現代』を中心に見ていくことにする。

Ⅰ、オルテガの「大衆人」

ホセ・オルテガ・イ・ガセ

スペインの哲学者。マドリッドに生まれる。マドリッド大学を卒業後、ドイツに留学し、27歳でマドリッド大学形而上学教授となる。1936年に勃発したスペイン内戦を機に祖国を逃れ、第2次世界大戦終了後、帰国する。

30歳の時、事実上の処女作『ドン・キホーテに関する思索』(1914年)の中で、「私は私と私の環境である」と宣言した。最初の「私」は私の「生」、2番目の「私」は自我をさす。しかし、そこには、自分の哲学は母国スペインを離れてはありえないとの思いが込められてもいただろう。

1898年、スペインは米西戦争に敗れ、最後の植民地とも言うべきキューバを失った。この敗北はスペイン人、特に若い知識人の間に深刻な危機をもたらした。スペインはわずか4世紀前には世界最大の帝国だったのである。スペインとは何か、一体どういう国なのか。彼らは真剣に問うた。祖国の精神的な再建を目指した一群の人たちは「98年の世代」と呼ばれている。オルテガはこれに続く世代であった。

当時スペインは哲学不毛の地であった。思想の領域で先行する人といえば、「98年の世代」の文学者ウナムノくらいであった。オルテガは彼一代でスペインの思想的水準を他の西欧先進諸国のレベルにまで引き上げることを自らに課したのではないか。政治、文学、芸術、歴史……、数多くの領域で積極的に発言した。個人誌『傍観者』はそのことをよく示している。発言するだけでなく、一時期は政治家にもなった。また、自ら西欧評論社という出版社を設立し、シュペングラーの『西欧の没落』等、他国の優れた著作の翻訳を刊行した。

多くのスペイン知識人と同様、彼もまた「スペインとは何か」が出発点であり、衰退しつつある母国スペインの現状を『無脊椎のスペイン』(1921年)において考察した。スペインにおける指導者と大衆という問題である。しかし、そこに見出したものの多くは単にスペインのみならず、広くヨーロッパ全体に見られる現象であった。「大衆の反逆」がそれである。彼は現代を危機の時代と見なした。その考察が代表作『大衆の反逆』(1930年)としてまとめられる。本書はまたオルテガの名を世界的にした作品である。

アメリカの雑誌「ニューズ・ウィーク」は、20世紀において本書がもつ意味を、18世紀におけるルソーの『社会契約論』、19世紀におけるマルクスの『資本論』に匹敵するものといち早く見抜いていた。今度久しぶりに『大衆の反逆』を読み直してみて、その博識と深い洞察に幾度も感嘆せざるをえなかった。『異邦人』、『ペスト』等で知られるフランスのノーベル賞作家A・カミュが、オルテガを「おそらくニーチェ以来もっとも偉大なるヨーロッパ人著述家」と評したのもうなづける。

(1)「大衆人」とは何か

a、「少数者」と「大衆」

1930年に出版された『大衆の反逆』は次のような一節で始まる。

「ことの善し悪しはともかく、今日のヨーロッパの社会生活において最も重要な一つの事実がある。それは、大衆が完全な社会的権力の座に上ったことである。大衆はその本質上、自分自身の存在を指導することもできなければ、また指導すべきでもなく、いわんや社会を支配するなどおよびもつかないことである。したがってこの事実は、ヨーロッパが今や民族、国家、文化の直面しうる最大の危機に見舞われていることを意味している。こうした危機は、歴史上すでに一度ならず襲来しており、その様相や、そのひきおこす結果は周知のところで、その名称も知られている。つまりそれは、大衆の反逆と呼ばれている。」[2)]

「大衆の反逆」という現象は、肉眼でも確かめられる。オルテガはこれを「密集の事実」と名づける。あちこちで「群衆」が目につくのである。都会には人があふれている。アパートは借家人で、ホテルは泊まり客で、汽車は旅行客で一杯である。街路は通行人で、喫茶店は客で、病院は患者で、劇場・映画館は観客で、浜辺は海水浴客で混み合っている。以前には起きなかったことが、現在起きているのである。それも、文化の比較的洗練された所産として、以前には少数者のために取っておかれた場所においてそうなのである。

群衆という概念は量的かつ視覚的である。今度はこれを質的に見ていこう。驚くべき事実が明らかになる。

オルテガによれば、社会は常に選ばれた「少数者」と「大衆」のダイナミックな協調である。少数者と大衆とは、人間の、根本的に異なる2つのタイプである。ここで、少数者とは人並み以上に才能に恵まれた人のことであり、大衆とは何ら特別な資質を持たない、ごく平均的で平凡な人たちのことを言う。文化を創造し維持してきたのはもちろん少数者の方である。大衆はこの文化を受け入れ、少数者の生み出した規範にも従って生きてきた。

少数者と大衆、これは社会的階層による区別ではない。いわば人間的な階層によるもの、つまりその人の生き方、在り方による区別である。両者は文字どおり峻別されている。もって生まれた資質の相違であるから、たとえ大衆の懸命なる努力があっても、大衆が少数者に変貌することはありえない。

大衆とは平均的な人たちである。彼らは万人に共通するもの、社会の中で特定の所有者のないものを体現している。皆がこうだからという理由で、自分も進んで同じことをしようとする。ありふれた型を繰り返すだけの人間である。何か特別な理由から、自分に価値を見出すのではない。自分をすべての人と同じだと感じ、そのことに苦痛でなく、喜びを覚える人たちである。自分に特別なことを課さず、あるがままの自分を保ち、「自己完成」の努力を払わない人たちである。

他方、少数者とは特別な才能をそなえた人、選ばれた人である。そういう優れた個人、もしくはそうした個人からなる集団である。彼らは他人よりも優れていることを鼻にかける高慢な人たちではない。たとえ自分には達成できなくても、自らに、他人よりも多くの、しかも高度

な要求を課す。積極的に多くの困難と義務を負おうとする人たちのことである。少数者こそが本質的に奉仕に生きている。

彼ら少数者は自分よりも優れた規範に奉仕する。そのような必然性を内に蔵している。自分の「生」を自分を超えたものに奉仕させないと、生きている気がしないのである。これが「規律からなる生」、「高貴な生」である。「高貴さの本質を示すものは、自己に課す多くの要求や義務であって、権利ではない。」[3)]

社会には、特別な才能をもった、優れた人間でなければできない仕事、活動、職務がある。そのことは認めざるをえない。芸術にかかわる仕事、行政の仕事、政治に関する仕事……。こうした特殊な活動は、少数者によって遂行されてきた。大衆はそういう領域に口をさしはさみはしなかった。口を出すためには、特別な才能を持たねばならないし、大衆であることを止めねばならない。そのことを承知していた。「大衆は、健全な社会の力学的関係のなかでの自分の役割を知っていたのである。」[4)]

大衆と少数者の決定的な違いを説明するのに、野球を例に取ってみよう。現役プロ野球選手の中で、一流中の一流として、野手でイチロー、投手で松阪を挙げることができる。プロ野球界には、二軍をも含めてたくさんの選手がいる。高校生、大学生、社会人にも、将来の一流プロ野球選手を夢見て練習している人たちが数多くいる。しかし、彼らの99.99％（いや、それ以上か）は、どんなに練習しても、イチロー・松阪のレベルには達しない。哲学の領域でも、たとえば筆者が一念発起し、今後死ぬまで血の滲むような努力を続けたとしてもオルテガには遠く及ばない。これは100％確実である。才能、資質とはかくも差別的なものである。

b、「大衆人」

従来の大衆は分をわきまえ、少数者に、彼らの作り上げた規範に従って生きてきた。しかし、現代の大衆は少数者に対し蜂起したのである。もはや彼らの作り出した規範に従おうとしない。それだけでなく、自らは大衆のままであるにもかかわらず、これまで少数者のみが占めていた地位に、彼らを押し退け、取って代ろうとする。現代の大衆は従来の大衆とは質的に異なるのである。いわば「反逆する大衆」、つまり本分を失った「堕落した大衆」なのである。オルテガは言う、「現代の特徴は、凡俗な人間が、自分が凡俗であるのを知りながら、敢然と凡俗であることの権利を主張し、それをあらゆる所で押し通そうとするところにある。」（傍点著者）[5)]この点しっかりと記憶しておかねばならない。

先の大衆の定義に従えば、大衆は必ずしも集団である必要はない。個人をも「大衆」と呼ぶことができる。オルテガはそのような、現代の大衆の個体を「大衆人 hombre-masa」と呼ぶ。日本語とは呼べそうにない訳語だが、ほかに訳しようがない。「大衆人」で御了承願いたい。

大衆人とは、オルテガの生きていた時代のヨーロッパに存在した、われわれと無関係な人間のことではない。大衆人とは現代の大多数の人間のことであり、当然日本人も含まれる。有り体に言えば、大衆人とは＜われわれ＞のことである。＜あなた＞のことであり、＜わたし＞のことなのである。

現代の危機は、この一斉に蜂起した大衆の「在り方」そのものに起因している。大衆人とはいかなる人間か。また、どのようにして産み出されたのか。大衆変貌の原因としてオルテガが挙げるのは、科学技術の発展と自由主義的な民主主義の普及である。以下でそのことを確かめることにしよう。

c、「世界」の変化

オルテガよれば、人間の「生」を構成する要素は「世界」（あるいは「環境」）と「決断」である。「世界」は可能性の総体を意味する。「生」とは、人間が「環境」の中に自己を見出すことであり、全可能性の中から唯一つを決断し、実行することである。

人間は自分に可能であること（選択肢）を常に意識している。可能性を可能性として生きているのである。それゆえ、「世界」がどのような様相を呈するかによって、「生」、生き方は変化する。「世界」が見せる基本的な相貌が、われわれの「生」の基本的な相貌でもあると言ってよい。そして、今日の「世界」は歴史上全く新しい様相を見せているのである。

20世紀初め、ヨーロッパ的「生」の先頭に立とうとしている人間、大衆人は19世紀に産み出され、そこで準備時代を過ごしてきた。その頃、彼らの「生」はどのような様相を見せ始めていたのだろうか。

まず、「物質的領域」においては、自らの経済的問題が解決し、安定がはかられた。平均人がこれほど楽に経済的問題を解決できたことはない。次々に新しい贅沢を自分たちの生活に加えていった。彼らの立場は安定し、他人の意志に左右されなくなった。「以前なら運命のもたらした恵みと思い、運命に対して謙虚な感謝の念を抱いたであろうことが、今では感謝しないどころか、要求すべき権利に変わってしまったのである。」[6)]

豊田堯『市民革命の時代』を参考に、いま少し補うことにする。19世紀ヨーロッパでは、＜フランス革命＞と＜産業革命＞が軸となって歴史が展開し、市民社会が形成されていった。1789年フランス革命を引き起こした思想によって、英仏両国のようにすでに統一を果たしている国では、民主主義、自由主義運動が発展し、そうでない国でも、民族統一と同時に民主主義運動が進展した。

1760年代イギリスで始まった産業革命は、19世紀初めにまず本国を「世界の工場」としたが、1830年以降には、他のヨーロッパ諸国でも、急ピッチに進行していった。この革命は、各国の生産様式を根本的に変え、社会構造をも最も深いところから改めた。この時代、政治経済の担い手も、地主貴族からブルジョアジーへと移った。豊田は、大衆に関してはこうまとめている。

「産業革命の進展とともに、貧しい工場労働者が創出され、悲惨な境遇におちいった者も多数いたけれども、全般的にみるならば、生活物資は豊かになり、交通運輸手段も改良され、科学技術が向上した。それにつれ、市民の日常生活は日ましに改善されて快適なものとなり、ヨーロッパの人口は飛躍的に増加した。」[7)]

オルテガの記述を追おう。経済的安楽さや安定性に、快適さと社会秩序の安定を加えることができる。道路、鉄道、電信、ホテル、また健康、衛生面で快適さが増大した。「彼らの生は

快適なレールの上を走っており、そこには過激なこと、危険なことが入りこむ余地など、とてもありそうに思えないのである。」[8] 広々として、さえぎるもののない状況。それは、スペイン民衆がかつて口にした「広大なるかなカスティーリャ！」という感情を思い起させる。新しい人間にとって、「生はあらゆる基本的な面において自由自在と見えた。」[9] これは歴史上、庶民が初めて抱いた感情である。

かつて、生きるとは「経済的にも肉体的にも窮屈な運命」、「否が応でも耐えねばならない障害の堆積」であった。大衆はこれを解決するには、ただ「さまざまな障害に適応し、自分たちに残された狭い場所に住みつくよりほかはない」[10] と感じていたのである。

「市民的領域」、「精神的領域」では、この状況はいっそう明瞭である。19世紀後半以後、平均人は自分の前に何の社会的障壁をも見出していない。社会生活の形式面で、何の拘束、制約にも出会っていない。彼らの「生」を抑制するものは何もない。法の前では、すべての人間は平等である。これは根本的な革新である。物理的にも、社会的にも新しい「世界」の創造である。「将来はより豊かで、より安全で、より広くなる。」そのことを、大衆人は「明日の日の出を信じるように信じている。」[11] のである。

新しい「世界」を可能にしたのは、自由主義的な民主主義、科学的実験、産業主義の３つの原理である。あとの２つを技術としてまとめると、自由主義的な民主主義と技術ということになる。これらの原理は17、8世紀に由来する。19世紀はこれらを定着させた。「19世紀は本質的に革命的であった。」[12] 19世紀が産み出した人間は他のどの時代の人間とも異なるのである。

(2)「生きることは容易である」

過去の平均人にとって、生きるということは、自分の周囲に、困難、危険、欠乏、義務、運命の制約、隷属等々を見出すことであった。「生」とは「自分が制約されているのを感じること、それゆえわれわれを制約するものを考慮しなければならないこと」であった。生きるとはさまざまな圧力を感じることに他ならなかったのである。

今日では、生きるとは、事実上無限の可能性を持ち、安全で、誰に依存しなくてもいいことのように見える。「なんらの制約も見いださないこと、したがっておとなしく自分自身のなすがままにすること。実際、いかなることも不可能ではないし、いかなることも危険ではない。その上原理的にはいかなる人間も他人よりすぐれていないのだ。」[13] 平均人にとって「世界」の相貌がそうなったということである。これで大衆の「生」が変わらないとすれば、その方がおかしいであろう。

ａ、甘やかされた子供

現代人の魂は、「世界」に対するこの印象をもとにして作られている。こういった基本的な経験は、これまでの大衆の伝統的で半恒久的な構造を一変させてしまうことになる。「大衆人」の心理を図式化し、その特徴を挙げるとすれば、ｉ欲望の果てしない膨張、ii安楽な生存を可能にしてくれたものに対する徹底した「忘恩」である。これらはちょうど「甘やかされた子供」、

「お坊ちゃん」の心理である。

こういう子供は、自分は一切のことが許され、欲望は制限されず、何の義務をも負っていないという印象をもっている。自分のまわりの圧力、他者との衝突は取り除かれている。自分自身の限界を経験することがない。この世界にいるのは自分だけだと感じるようになる。他人を考慮しない習慣、特に、どんな人間も自分より優れているとは考えない習慣が身についている。「お坊ちゃん」は、ただ自分がしたいことをするだけのために生まれてきた人間、義務はなく権利だけがあると思っている人間である。

b、相続人

大衆人は快適さや安全性など、文明のさまざまな便益を相続した人である。大衆人はまた「相続人」というカテゴリーに入る。オルテガは、相続人とは「贅沢が人間のなかに生みだす幾多の奇形の一つである。」[14] と断言する。

われわれはともすれば、あり余るほど豊かな世界に生まれた「生」は、欠乏との戦いそのものである「生」よりも、質的にすぐれていると考えてしまう。しかし、それはまちがいである。「あり余る可能性に満ちた世界は自動的にひどい変形をもたらし、人間存在の欠陥多いタイプを産み出す。」[15]「世襲貴族」がよい例であろう。

世襲貴族は、自分が作り出していない「生」の条件、つまり必ずしも彼自身と有機的に結びついてはいない「生」の条件（富、特権など「親の七光」）が、すでに自分に与えられているのを見出す。親、先祖の「生」の、いわばぬけ殻の中で生きねばならない。「生とはすべて自己実現のための戦いであり、努力である。」[16] 相続人である世襲貴族は自分に固有の「運命」（あるべき姿、状態－筆者注）を生きることができない。多くその「生」は萎縮してしまう。

c、原始人

大衆人は世界の中にあり余るほど豊かな手段を見て、そこにひそむ苦悩を見ない。薬や道具を発明したり、その生産を将来も保証することがいかに困難であるかを知らない。国家がいかに不安定なものであるか理解できない。19世紀が「生」のいくつかの側面（物質的、市民的、精神的、…）に与えた組織の完全さのゆえに、大衆人はそれを人工的な組織とは考えないのである。

「そうした便宜のすべてが、今でも人間のある種の得がたい能力にささえつづけられていて、その能力が少しでも欠けると、みごとな構築物も急速に崩壊するという考えなどは、なおさら認めようとしない。」[17] そういう能力の持ち主、つまり少数者に何の恩も、感謝の念も感じない。そういう人たちがいることにすら、想像力が及ばないのである。

大衆人は文明の成果に関心はあるが、原理に関心はない。文明の産物を「自然物」のように思っている。まるで山野の木になる果実のように。文明を享受することを、することだけを、生まれながらの権利であるかのように要求する。現代の大衆は文明の真っ只中に現れた「原始人」、「野蛮人」である。

d、「自分よりも優れた審判」を認めない

大衆人はあるがままの自分に満足している。自分の内に見出す意見、欲求、嗜好を、この世で最も自然なものと認め、それをよしとしている。従来の大衆と異なり、自分の道徳的、知的財産はりっぱで完璧なものと考えている。自分自身の中に閉じこもり、どんな人にも物にも関心を払うことができず、自分だけで充分と考えている。「大衆人の魂の基本的構造が、自己閉鎖性と不従順さから成り立っている。」[18] のである。

大衆人は人の指導を受け入れない。自分の意見を疑わない。他人の存在を考慮しない。自己満足の結果、外部からの働きかけに自己を閉ざし、人の言葉に耳を傾けないのである。支配感情が絶えず彼らを刺激し、支配力を行使するよう仕向ける。自分たちとその同類しかいないように振舞う。

「大衆人は環境に無理強いされないかぎり、けっして自分以外のものに頼ることはないだろう。」[19] とオルテガは言う。そして、現代の世界は大衆人に、自らの限界を感じさせ、自分以外に、それも「自分よりもすぐれた審判」があると考えるように仕向けるものは何もないのである。

オルテガは第1部「大衆の反逆」の最後の章でこう書く。

「真の哲学――これがヨーロッパを救いうる唯一のもの――が再びヨーロッパを支配する日が訪れた日には、人間とはその本質上、好むと好まざるとにかかわらず、自分よりすぐれた審判 una instancia superior を求めざるをえない存在であることが再び認識されるだろう。もしその審判を自力で発見できれば、それはすぐれた人間であり、もし自力で発見できなければ、それは大衆人なのであり、すぐれた人間からそうした審判を受けとる必要があるのだ。」[20]

オルテガの主張は一貫している。これはオルテガの<根本思想>である。「人間とはその本質上、好むと好まざるとにかかわらず、自分よりすぐれた審判を求めざるをえない存在である」。「自分よりすぐれた審判」なしには生きられない存在である。この事情は、この世に人間が存在するかぎり変わらない。「その審判を自力で発見できれば、それはすぐれた人間」である。彼らは「少数者」と呼ばれてきた。「もし自力で発見できなければ、それは大衆人なのであり、すぐれた人間からそうした審判を受けとる必要があるのだ。」従来の大衆は自らの本分をわきまえ、「少数者」の作り出した規範に従って生き、義務を果たしてきた。しかし、現代では、「凡俗な人間が、自分が凡俗であるのを知りながら、敢然と凡俗であることの権利を主張し、それをあらゆる所で押し通そうとする」のである。

(3)本当の問題

a、「どんなモラルにも束縛されずに生きたい」

『大衆の反逆』は第1部が「大衆の反逆」、第2部は「世界をリードしているのは誰か」となっている。その最終、第15章を「本当の問題は何か」と題して、大略次のように書いている。念のため繰り返すが、本書が刊行されたのは、今から70年前、1930年である。

「問題は、今やヨーロッパにモラルが存在しなくなったということである。」それは、大衆

人が新しく生まれつつあるモラルの方を尊重し、旧来のモラルを軽視しているからではない。ほかでもなく、大衆人の「生」の中心に、「いかなるモラルにも束縛されずに生きたいという願望」があるからである。

若者たちが「新しいモラル」について語るのを聞いても、信用してはならない。今日のヨーロッパには、「一つのモラルの外観をそなえた新しいエトスを身につけている集団は、一つとして存在しない」。「新しいモラル」について話すこと、それ自体が今日ではモラルに反することなのである。現代の人間に、モラルの欠如を責めるのは無邪気な行為である。通じないばかりか、かえって相手を喜ばせることになろだろう。

「現代を代表するすべての人びとのなかに、その人の生に対する態度が、自分はあらゆる権利は持つが義務はいっさい負っていないという信念に要約しえない者は一人もいないだろう。」大衆人は完全にモラルを欠いている。「モラルとはその本質上つねに、何物かに対する服従感であり、献身と義務の自覚である。」[21]

余談だが、筆者が『大衆の反逆』を初めて読んだ時（20歳だったろうか）、この「今やヨーロッパにモラルが存在しなくなった……」という指摘には衝撃を受けた。数年後、小林秀雄（1902～1983）に熱中していた頃、小林も1938（昭和13）年「志賀直哉論」の中で、この箇所を受けてであろう、「オルテガが明らかに洞察しているように、『規範がないというよりむしろ規範に人間が従わないという特徴を持った危機が現代に生じている』」[22] と書いているのを知って、いっそう共感を覚えたことを記憶している。

b、個性的な「生」を回復できるのか？

『大衆の反逆』刊行７年後の1937年、本書の仏訳が出されたが、オルテガはそれに「フランス人への序文」を寄せた。そこで彼はこのように書いたのである。

今日支配的な人間のタイプ、大衆人とはいかなる人間なのかを理解すれば、次に、「より実りのある、より劇的な疑問」が湧いてくる。「このタイプの人間を矯正することができるだろうか？」という疑問である。大衆人とは、自分よりすぐれた審判を認めない閉鎖的な人間である。そういう人間が「矯正」に応じるだろうか。彼らが持っている欠陥は、「もしそれが取り除かれないと、必然的に西欧を絶滅に導くほどのものである。」と言う。「救いの可能性のすべてが懸かっているもう一つの決定的な疑問」がある。それは「大衆がかりに望んだとしても、個性的な生を目覚めさせることができるだろうか？」（傍点引用者）[23] という疑問である。

オルテガの答えはないが、これらの疑問の形にこそ、「個性的な生の目覚め」に対する絶望的な見通しを感じることができる。

過日、夕刻のラジオ番組、「諸口あきらのイブニング・レーダー」の１コーナー「近藤さんのラジオ・イミダス」で、毎日新聞夕刊編集長近藤勝重氏が、近頃の若者の振る舞いに対して、「最近、若者の〈猿化〉が進んでいる。道徳がどうのこうのなんて言わない、とにかくしつけの方をなんとかしてほしい」と話した。かつてオルテガが「野蛮化」と呼んだものは、今では〈猿化〉と呼ばざるをえないところまできているということであろう。しかし、猿はどこまで

いっても猿だろうが、本能などという便利なものをもたない人間は、近々<猿>以下になってしまわないだろうか。

今日では、もはやモラル云々などというレベルの問題ではないのだろう。ピカートは、人間は、さらに「アトム化」したと言っているのだから。

c、オルテガからピカートへ―「自己沈潜」―

オルテガによれば、動物のメカニズムの中で、最も重要なのは「注意（力）」である。「私たちの注意が向うところ、そこに私たちはいる。」動物の注意は常に外を向いている。人間のみが自分の注意を外側から内側へと転じることができる。オルテガはこの真理を、マドリッド市内レティロ公園内の猿の檻の前で発見したという。猿はいつも落ち着きなく、周囲に目を光らせている。人間だけが外部に背を向け、自分の内部に入り、自己に沈潜することができる。一見単純そうに見えるこの能力が、「人間を人間らしくすることのできるもの」[24] である。人間が物事を落ち着いて、深く考えることができるのも、このような「自己沈潜」によってである。

猿は、猿だけでなく、どの動物も常に外にいる。「自己疎外」の状態にある。動物は「内部」を持っていないのである。したがって、「自我」を持っていないのである。周囲が平安を乱さず、動物が注意を払わなくてもよくなれば、動物はもはや存在しなくなる。つまり、眠ってしまうのである。

人間が自分の内部に入り、そこに留まることを、オルテガは「自己に沈潜する ensimismarse」と言う。この行為こそが人間を人間らしくする。ということは、人間が「自己に沈潜すること」を怠れば、人間は動物的に、つまり野蛮になっていくのである。これは危機の時代にはいつも起こった。人間の「再野蛮化」と呼ばれる現象である。大衆の反逆もその一つの現われである。

オルテガは「大衆がかりに望んだとしても、個性的な生を目覚めさせることができるだろうか？」と問うた。「個性的な生」を回復できるかどうかは、「自己沈潜」にかかっている。では、今日なお「自己沈潜」は可能であるのか？その答えがマックス・ピカートの一連の著作であろう。

次の節に移る前に、これまでをまとめておこう。

かつて大衆にとって、生きるとは、周囲にさまざまな困難を見出すことであった。大衆とは特別な才能を持たない平凡な人たちである。彼らは優れた少数者に従って生きてきた。そうしなければ生きてこれなかった。しかし、19世紀の文明、特に自由主義的な民主主義の普及と科学技術の発展は、「生」の諸条件を大きく変えた。「世界」は一変した。大衆の目に、生きることが容易であると見えるようになったのである。現代の大衆、大衆人は、もはや少数者のリードに従わない。大衆としての本分を、義務を果たさないのである。それどころか、彼らは大衆のままでありながら、凡俗であることの権利を主張する。少数者を押し退け、その席に着いたのである。これが「大衆の反逆」である。

人の意見に耳を貸さない。安楽な生活を可能にしてくれた先人たちに感謝をしない。文明を自然の産物のように思っている。まるで「甘やかされたお坊っちゃん」である。義務を果たさ

ない、規範に縛られたくない。自分のやりたいようにやる。「自分より優れた審判」を認めない。けれども、権利だけは主張する。これが大衆人の内実である。

坂田は、「人間はとっくの昔に vermassen した（オルテガ）。vermassen した人間はさらに atomisieren して分裂症的に幽霊化してきた（ピカート）。」と言った。つまり、大衆人が、その上に「アトム化」したということになる。では、ピカートの「アトム化した人間」に移ろう。

Ⅱ、ピカートの「アトム化した人間」

マックス・ピカート

スイス国境に近い、ドイツのシュヴァルツヴァルト地方の村ショップハイムに生まれる。ユダヤ系スイス人であった。大学では医学を学び、卒業後ハイデルベルク大学の助手、のち一時期ミュンヒェンで開業。しかし、当時の機械的、実証的な医学に肌が合わず、医学を放棄。「現代の病いを診断し、その唯一の癒しを指示する」という「医学よりも大きな仕事」に従事することを決意。執筆活動を開始する。

1920年頃、女医でもあった、病気がちな夫人の健康を考え、自然豊かなスイスのルガノ湖畔の村カスラノに移り住む。妻に先立たれるも、その地に住み続け、「観想と思索の質素な生活」を送る。1965年の秋、早朝、散歩中に転倒し、骨折の大怪我。それがもとで同日逝去。享年77歳であった。

彼の著作は『神よりの逃走』(1934年)、『われわれ自身のなかのヒトラー』(1946年)、『沈黙の世界』(1948年)、『人間とその顔』(1952年)、『ゆるぎなき結婚』(1952年)、『騒音とアトム化の世界』(1953年～1958年。日本で編まれた小論集－筆者注）などがあり、そのほとんどが邦訳され、わが国でも多くの読者を得ている。

拙論との関連では、まず『われわれ自身のなかのヒトラー』を取り上げねばならない。第2次世界大戦後まもなく出版された本書は、そのタイトル自体が衝撃であった。ヒトラーはわれわれと全く異なった人間ではない。われわれの中にもヒトラー的なものがある。いや、われわれ自身がヒトラーと同種の存在だと言ってさしつかえないということである。

本書でピカートは「あたらしい人種」という章をもうけて、現代ドイツ人の特徴を述べている。「内的連続性」、「内的連関性」の喪失である。ピカートはのちにこの喪失を「人格のアトム化」と呼んでいる。両者はどういう関係にあるのか。「内的連続性」がなければ「内的連関性」はないし、逆に、「内的連関性」がなくても「内的連続性」はない。対のように、表裏のように使われていると筆者は思う。では、「内的連続性」、「連関性」を喪失した人間とはどのような人間か。言い換えれば、現代人とはどのような人間なのか。いや、われわれとは一体何者なのか。ピカートの言うところを聞くことにしよう。

ところで、『神よりの逃走』に付された「この本の読者へ」の中で、訳者の一人坂田徳男は「ピカートは単なる哲学者ではない、しかしピカートには哲学以上の哲学があり、稀な詩人的存在」であると書いている。実際、ピカートの考えを要約することは難しい。詩を解説しよう

とする時のような困難を覚える。

(1)「あたらしい人種」

a、記憶を喪失した人間

毒ガスで多くのユダヤ人を惨殺したナチ党員たちを、普通の生活に連れ戻すことは可能か、というある博士の問いに、ピカートは「この毒ガス殺人鬼は、ふたたび正しい秩序に容易に、いや、あまりにも容易に馴れるにちがいありません。」[25] と答えている。

言うまでもなく、ナチとは、ヒトラー（1889〜1945）が1921年に創設した国家社会主義ドイツ労働者党、またその党員を意味する。ナチスはその複数形である。

戦争が終われば、彼らナチスは毒ガス殺人など何事もなかったかのように、もとの仕事に戻ることができる。常日頃から戦争を欲し、まっとうな職業にもつかないアウトローの人たちよりも、この人たちの方が怖ろしい。「怖るべきは、そのような人間が、自己の犯した殺人罪をさらりと忘れてしまうことだ」[26] とピカートは言っている。ナチはすべてを忘却する。「内的連続性」をもたないからである。ナチとはいわば「記憶を喪失した人間」である。

郵便局員、たばこ屋を例にとろう。「彼が郵便切手や葉巻を売っているときには、彼の心のなかにはそれらの品物を売ること以外には何もない。いや、それどころではない。まるで、生まれおちてからそれ以外のことはしたことがないかのようでさえある。彼という人物はこの瞬間には、徹頭徹尾、郵便切手か葉巻煙草を売ることだけで成り立っているのである。」彼がナチとして人殺しをする場合もまったく同様であった。殺人の瞬間には彼の内部にはただ殺人行為だけがある。人を殺すことしかしたことのない人間の場合と何の相違もないのである。この瞬間、彼は思う存分殺人行為に没頭できる。「彼が刹那的におこなう行為は、それに先立つ何らの出来事とも連関してはいない。」[27] 言い換えれば、ナチは「瞬間」のみから成り立っている。「記憶喪失」の根本原因はそこにある。

実際、現代人は忘れやすい。大事なこともすぐ忘れてしまう。そのことを、暢気にも「現代は時代のテンポが速い」などと言っている。阪神・淡路大震災をわれわれは忘れている。地下鉄サリン事件も忘れてしまっている。1月17日がくると、3月20日がくると、ああそういえばそういうことがあったな、あれからもうそんなになるのかなどと思い起こすのが関の山である。おそらく次の日には、また忘れてしまうだろう。昨今のトピックは「少年犯罪」である。このことは3年前にも話題になったはずであるが……。

b、刹那的人間

拙論冒頭に引用した論文で、坂田はベルクソンの「持続」に触れている。ベルクソンがその著書『意識に直接与えられているものについての試論』の中で、「持続」について最初に論じたのは、1888（明治21）年であった。大哲学者の主要概念を説明するのに、著書から1、2ヵ所の引用で済ませるのは早計だが、とりあえず坂田の訳した『形而上学入門』（1903年）から拾っておくことにしよう。

それによれば、われわれが単なる分析によらず、内部から直観によってとらえることができる実在が少なくとも一つ存在する。それが内的な「持続」である。言い換えれば、「時間の内を流れているわれわれ自身の人格」であり、「持続しているわれわれの自我」である。

「内的持続とは過去を現在へ延ばし続ける記憶の連続的な生であり、過去が現在へ延び続けるというとき、休むひまなく増大していく過去の心像が、判然たる形で現在のうちに含まれていることもあるだろうし、あるいはむしろ現在はその性質の絶え間もない変化によって、われわれの背後に背負っている記憶の重荷が、われわれの老いゆくにつれて重さを増すのを示すこともあるだろう。ともかくも、このように過去が現在のうちへ生き続けるということがなければ、持続というものはなく、あるものはただの瞬間だけであろう。」[28]

ベルクソンの危惧は半世紀ののち、現実のものとなった。ナチの内部には、過去が含まれていない。過去が現在へ延び続けていないのである。彼らには「持続」がない。「内的連続性」がない。「あるものはただの瞬間だけ」である。

ナチの内部には、瞬間が偶然に放り込んだもの以外には何もない。ナチとは「刹那的人間」である。ナチの内部には、過去から継承したと言えるような財産は何も存在しない。だから、ナチ＝現代人はどんなことをもあえてしてはばからないのである。こういう人間には、「教訓」は成り立たない。「現代人が万事を新規にやりなおし、万事を革新しようとするのもそのためである。」[29]

ナチの内部世界は、支離滅裂な、連関性喪失の状態にある。その内部には何ものも留まることはできない。「人間がおのれの為したことを心の中に抱きしめている場合にのみ、人間は自分の過去の行為を一つ一つ点検し、それを吟味し、自分のなした罪悪について懺悔の念を懐くことができるのである。」[30] ナチの心の中には、何ものも存在していない。何事も一瞬たち現れるだけである。次の瞬間にはあとかたもなく消失している。「内的連続性」がなければ「懺悔」はない。従って、「改善」もまたありえないのである。

ナチは「内的連関性」も「内的連続性」も持たない。記憶を喪失した、刹那的な人間である。1946年での発言であるが、ピカートによれば、そういう人間はナチだけではない。ナチほどひどくはないが、ドイツ人全般ががそうである。ドイツ人だけではない。ドイツ人ほどではないにしても、ほとんどすべてのヨーロッパ人とアメリカ人もそうなのである。今なら、日本人はもちろんのこと、世界中のほとんどすべての人が「内的連続性」、「連関性」を喪失している。ピカートはきっとそう言う。

c、発展なき人間

ピカートは言う。

「ヒムラーが相当なバッハ演奏者であったり、チェッコスロヴァキアでの残虐行為を指揮したハイドリヒが、モーツァルトの音楽を聞いて演奏会場で落涙したりなぞしたことを不思議に思ってはならないのである。」[31]

ヒムラーはナチス親衛隊長官を務め、強制収容所における残虐行為の主要責任者。ハイドリッ

ヒは国家秘密警察（ゲシュタポ）長官をも務めた人である。彼らナチス大幹部の内部では、殺人とバッハ、ガス室とコンサート会場、……それらが平気で並んでいる。「内的連関性」を失った者の内部にあっては、ちっとも不思議なことではない。ごくありふれたことなのである。

「内的連関性」、「連続性」を喪失した世界は刹那性の世界である。何事でも、ほんの一瞬しか存在しない場合には、もはや、それが「如何ようにあるかということ」には注意が向けられない。「ほんの暫くたち現われてはふたたび消えてゆくこと」[32] に注意が払われるだけである。ここでは、いわば「刹那的なものの仕掛」によって、すべてが均等化される。均等に無意味なものとなる。もはや善と悪との間に違いは存在しない。して良いことと悪いことの区別もつかないのである。

「『瞬間』だけしか存在していないところには、何ごとかが有機的に、ゆっくりと成長するための時間が存在しないのは当然である。そこには量における増大しかあり得ない。もろもろの事物は量的にものすごく増大してゆくが、多種多様に自己を形成するための時間が与えられてはいないのである。」[33]

現代世界では「成長」が不可能である。現代人は「発展なき人間」である。ナチスもまた膨張、増大したが、「発展」しはしなかったのである。

以上で「あたらしい人種」のデッサンは終わり、『騒音とアトム化の世界』所収「人格のアトム化」に移ろう。本論は『われわれ自身のなかのヒトラー』出版の15年後、1958年に書かれたものである。

(2)人格の「アトム化」

a、「アトム化」

ピカートは冒頭、ロシアの文豪ドストエフスキーの「人間が神を信ずることをやめるならば、彼はもはや人間としてのその姿を保持することは出来ない。」[34] を引用する。論文の意図はここに明らかである。

「アトム化」とは原子爆弾 atomic bomb から取られた言葉である。ピカートは、現代人の内的構造は原子爆弾のそれと同じだと言う。すなわち、「引き裂かれ、また自らも裂きながら——解体せられ、また自らも解体の作業をおし進めながら——分裂され、自らも分裂を推進しつつある」[35]。

われわれは「内部的に連関性を喪失した右往左往の状態のなかに生活している。われわれは内的に引き裂かれてしまっている」。無連関、非連続の中で生きているのである。

「内的連関性」の喪失とは、正しく次のような状態を言う。

「一つの印象、一つの感情、一つの思想は、孤絶されながらそれぞれ別の印象や感情や思想のそばに平気で並んでいる、——いや、他の印象のそばに並んでいるのではなく、まるでそれに先行するものがまったくなかったかのように、つぎつぎにたち現われるのだ。」（傍点著者）[36]

そういう人間は、ある時にはドイツの詩人ヘルダーリンの作品を読み、理解することができ

る。しかし、つぎの瞬間には自分の父親を密告したり（ナチスの時代のことを言っている－筆者注)、あるいは殺害することさえできるのである。そのことに何の不思議もない。何事にも連関性が失われたのである。本当の意味で存在していると言えるものは何もない。

今、「ヘルダーリンの詩」があったかと思えば、次の瞬間には「父親殺し」がある。蛇足だが、筆者は、この「瞬間」を文字通り「一瞬」と考えると誤解を招くのではないかと思う。＜わずかな時間＞と考えるべきだろう。あるいは文字通り「瞬間」の場合もあるかもしれない。2、3分のことも、2、3時間、2、3日のこともあるだろう。あるいは2、3週間、2、3ヵ月、ことによると2、3年のこともあるかもしれないと思う。

もはや、「対象」なるものは何の意味をももっていない。「絶え間なく何ものかが瞬間を通って滑ってゆくだけである。」[37] 対象は、ただ瞬間を埋めるためだけの「充填物（つめもの)」に成り下がったのである。

すぐれた詩を読むと読者の魂は高揚する。しかし、現代人には、魂の高揚が保持されるような「内部世界」がない。「内部世界」の欠如は、それだけに止まらない。殺人という行為が殺人者に「恐怖」を感じさせることもなければ、「悔恨」の念を喚び覚ますこともない。殺人者は自分の犯したことを認めることができない。それを覚えてはいないのである。なぜなら、「彼は、一つとして互いに連関することのない瞬間によって、瞬間的に生み出されるのだからである。」[38] 殺人者は自分の「内的歴史」を所有していない。だから、自らの行為について「沈思」することができない。「悔恨」も「更正」も可能ではないのである。

ピカートは今日ではごくありふれた、次のような日常の一場面を描いている。誰もが思い当るように思う。

「私はかつて一人の男がテレヴィのまえに坐っているのを見た。そのそばで同時にラジオが鳴っていた。しかも同時に、この人は時折りテレヴィから目をはなして新聞を読んだ。一体この男はどこにいるというのだろう。テレヴィのなかにいたのか、新聞、ラジオ、或いは安楽椅子のなかにいたというのか。彼はすべてであり、そして無であった。至るところにおり、しかもどこにもおらなかった。そして彼が望んだのは、正にこのことであった。」[39]

オルテガの「私たちの注意が向うところ、そこに私たちはいる。」を思い出していただきたい。この人はどこにも注意を集中していない。何にも没頭していない。「心ここにあらず」という言い方があるが、この場合、「心」はどこにもないのである。

この人間は自己自身から逃走しているのではない。「自己」を持たないのである。この人の振る舞いは、オルテガがマドリッド市内レティロ公園内の檻の中に見たという猿そのものではないか。

そういえば、筆者が大学に入ってまもなく（1960年代の終り）の頃、「ながら族」という言葉が生まれた。つまり、受験勉強を、ラジオの深夜番組を聴きながらするという学生が登場してきたのである。あれはアトム化の初期段階だったのだろうか。今は「ながら」が3つも4つも重なっている。

われわれの回りには、「人間アトム化の装置」といってもいいようなものがあふれている。

ピカートは大都会、ラジオ、映画、演劇などを挙げている。アトム化した現代人の作り上げたものすべてが、われわれのアトム化をさらに推し進めるのであろう。

b、対象との出会い

現代では、対象との出会いは、映画、演劇にもテレビ、ラジオにもない。そこでは「すべてがわれわれの眼前に浮かびあがったかと思えば、またまた消えてゆくのである。」[40]

戦後間もない昭和24年生まれの筆者にはこんな思い出がある。昭和30年頃、日本では、子供はもちろん、大人たちの多くもアトム化していなかったろう。まだテレビは普及していなかった。子供にとってラジオが何よりの娯楽であった。午後6時頃から子供向けの番組があった。その一つが「ジャン・バルジャン物語」であった。番組の始まる30分くらい前から、待遠しくてしようがなかった。6時（？）になると、3人兄弟が古ぼけたラジオのまわりに集まるのである。ジャン・バルジャン、コゼット、ジャヴェール警視などの登場人物。ジャン・バルジャンはなぜ銀の燭台を盗んだのか？　コゼットはなんてかわいそうなんだろう。ジャヴェールはなぜジャン・バルジャンを見逃してやらないのか？　胸をどきどきさせながら聞いた。番組の終わるのが口惜しくてならなかった。終わってからも兄弟で今後どうなるのか話し合った。

映画は好きな方ではなかったが、高校1、2年の（昭和40年）頃、「嵐が丘」「誰がために鐘は鳴る」それに「汚れなき悪戯」等を見た。「汚れなき悪戯」のテーマ音楽マルセリーノの歌は今も心に響いてくる。「嵐が丘」も「誰がために鐘は鳴る」も、映画を見る前に、原作を読んでいた。前者では、荒涼たるヒースの丘に目を見張った。後者では、ヒロイン、マリアを演じたイングリッド・バーグマンの印象が鮮烈だった。

そこには「対象との出会い」があった。日本人の多くと同様、筆者もまだアトム化していなかったと思う。そういう前提で、以下、ピカートの記述を追っていこう。

ピカートは、「出会うとは、われわれの前にあるものに対して答える respond ことである。」[41] と言う。現状では、われわれは答えることができない。あまりにも多くの対象が投げ与えられる。もはや答えねばならないと思いつかないのである。

この場合「答える」とはどうすることなのか。管見によれば、対象に答えるとは、対象のあるがままを受け容れること、それがもっている意味、価値を正当に認めることであろう。

対象は人間の場合もある。風景のこともある。文学作品、絵画、文化財のこともある。しかし、連関性を喪失した人間は、もはや自己自身に対しても、他人に対しても、また事物に対しても、現在していない。現われては消える「瞬間的なものの急激な速度によって、われわれは、われわれのまえにあるすべてのものから追い立てられる。われわれにとっては何らの現在性も存在してはいない。」[42]

現代人は時間をもっていない。だから、対象も現在してはいない。対象が心に残らないということだろう。「彼は愛をもたないからだ。」とピカートは説明する。愛は時間を、持続を前提とする。「愛と時間とは相い依って一体をなす。」

「愛情のある人間は、他の人々やもろもろの事物のまえに立ち止まる、そしてそれらの人々

や事物に時間を与える、……それがとりもなおさず愛なのだ。」[43] 愚見を交えれば、対象に答えるためには、対象がその本来の姿を、つまり、対象がもつ意味、価値を現わすまで、待たねばならない。じっと待つ、それが「人々や事物に時間を与える」ということだろう。そして、「それがとりもなおさず愛」、つまり相手を受け容れ、尊重し、大切に思う気持ちであろう。

ピカートは続ける。「人間が愛することの出来るのは、彼が全的なものである場合のみである。」人間ももちろんかつての時代は「全きもの」であった。「内的連関性」、「連続性」をもっていた。「愛は一つの全きものから生じ、そしてまた一つの全きものへ到りつこうとするのである。だが、全的なもの、そしてただ全的なるものの雰囲気のなかでのみ生きうるもの、即ち誠意や愛や善意などは、アトム化によって失われてしまった。」[44]

われわれは周囲の事物に対して再び答えねばならない。「人間は沈黙せる諸事物と、人間のうえにあるより高次のものとの仲介者なのだ。だが一方、われわれ人間は諸事物自体の沈黙を通じて、一つのより高い沈黙に結びつけられているのである。われわれはもろもろの事物のまえに立ち止まらねばならない、そしてそれらの事物のために時間を持たねばならないのである。」[45]

「人間のうえにあるより高次のもの」、「一つのより高い沈黙」についてのコメントはあとに譲ろう。ここでは、アトム化した現代人は、対象との出会いを失ったこと、それは時間を持たないこと、同じことだが愛を失ったことに原因するということを心に止めておこう。

(3)われわれは「没落」するのか、「救済」されるのか？

アトム化は現代において初めて現れた現象ではない。いつの時代にもアトム化した人間はいた。それは個々の人間であった。今日では、内的アトム化が存在の様式である。「われわれは今日の時代に生きているという単なるそのことによって、すでにアトム化されているのだ。」[46]

では、人間は滅びるのか。「いや、人間は救われ得る。」とピカートは言う。内的アトム化が明瞭であるにもかかわらずではない。明瞭であるからこそ、そうなのだと。アトム化の現象はあまりにも明瞭である。それは、われわれに「戒慎」をせまっているのである。言い換えれば、アトム化の現象がもはや終局に達しており、われわれは「破滅」か「救済」かの岐路に立っていることを示しているのである。

a、一体なぜ人間の人格はアトム化したのか？

「かつては人間は一つの中心 Zentrum をもっており、そのことによって纏りのとれたものとして保たれていた」[47]。人間が「纏りのとれたもの」として存在するのには、「一つの中心」が必要である。ヨーロッパの場合、「中心」はキリスト教の「神」であった。

「中心」が必要なのは、何もヨーロッパの人間に限ったことではない。ピカートは、1955年頃だろうか、彼を訪ねてきた中国人の話を紹介している。その中国人は言う、「われわれは両親、祖父母、曾祖父母など、われわれの祖先を敬います。われわれは祖先崇拝によって生きているのです。われわれは祖先へむかって生き、そして死ぬのです。」つまり、革命前の中国人

たちにとっては、祖先が「個々の人格を統御し、彼等を支える中心だったのである。」[48]

ヨーロッパの人間は「中心」として「神」を持っていた。中世の末期に、「神」に敵対し始めた時も、人間は崩壊してはいなかった。人間は「全的なもの」として、まとまりある姿をとっていた。第一次世界大戦頃までは、人間の人格はとにかく一個の「全的なもの」として存在していたのである。

19世紀の初め以来、人間は「神」からも自己自身からも「逸脱 Wegschweifen」し始めていた。「逸脱」によって、何かを探し求めていた。ニーチェ（1844〜1900）は「神」に敵対し、「神は死んだ！」と叫んだが、「神の沈黙」という壁に当たって返ってきた反響に「投げ倒された」。ひとりの「全的な人間」の破滅であった。

「神は沈黙した。」とピカートは言う。人間の攻撃に対する「神」の返答である。それは「この上もなく怖るべき脅威」であった。「神に敵対する人間の言葉がこの沈黙のなかで消えていったように、人間自身がこの沈黙のなかで何時いかなる瞬間にも消失しえたのだからである。」

やがて人間は「神の沈黙」を理解しなくなった。「沈黙」を「空虚」と取り違えるようになったのである。「神」は存在しないと思うようになった。人間はまとまりある姿をとっている必要がなくなった。敵対すべきものがなくなったからである。「逸脱」のための「逸脱」が始まる。かくて人間は崩壊した。「人間はなんといっても神の沈黙によって崩壊したのである。」[49] それがピカートの答えである。

b、ひとつの「希望」あるいは「確信」

「神」との連関によって、人間自身が再び連関性を回復すべきである。「神」は人間を崩壊から護り、支える中心である。どのようにして「連関性」は回復されうるのか。「非連続性の、連関性喪失の、潜勢力はあまりにも大きいから、人間は絶え間なくこの中心——神——から引き離されるのだ。」[50] 絶え間なく信仰は奪い去られている。

「しかしそれでも、今日、毎瞬間ごとに信仰を恢復し、毎瞬間ごとに信仰から見はなされ、この動揺の緊張のなかで消耗しながら生きることはやはり可能である。そしてまた、そのような人間には天の救いの手がさし伸べられることもあり得ないことではない。いや、恐らくはあり得ることである。そのような人間は救われる、そして自分では知らず識らず他の人々も救うのである。」[51]

そのような人たちは今もいるに違いない。でなければ、アトム化の現象は世界をすでに粉々にしているだろう。ピカートは「世界は36人の義しき人たちのうえに安らっている」というユダヤの伝説を紹介する。この伝説はフランクル（1905〜1997）も第２次世界大戦後間もなく、ウィーンで行なった講演の中で紹介している。ユダヤ系の人にはごく親しいものなのだろう。

いつの世にも36人の「義しい人々」はいる。今日では、どこかの工場の一労働者がそうかもしれない。あるいは事務所に勤める一職員がそうであるかもしれない。いずれも目立たない、隠れた存在のようだ。誰も彼らをそういう人だとは知らないし、彼ら自身、自分がそういう人間だとはつゆ知らない。彼らもお互いに知りはしない。しかし、そういう人たちはいる。「彼

等はいる。それで充分なのだ。それで充分であるに違いない。世界の柱は彼らのうえに安らい得るのだから。」[52] と。

これはピカートの「希望」である。「確信」でもある。では、36人の「義しき人たち」ではない、われわれ平凡な人間は何をなすべきなのか。

c、人間はいま何をなすべきなのか？

「対象との出会い」を思い出していただこう。諸事物が人間に与えられるのは、人間が「自己自身を完成する」ためであると同時に、諸事物を「完成する」ためである。諸事物は人間を通じて「自己自身となる」ことを望んでいるのである。

先にあった「人間のうえにあるより高次のもの」、「一つのより高い沈黙」とは、キリスト教の「神」である。人間は諸事物と「神」との仲介者である。他方、われわれ人間は諸事物自体を通じて、「神」に結びつけられているのである。

われわれのアトム化脱出の鍵は、その「対象との出会い」の中にある。

ピカートは言っている。

「人間は眼前にある対象、アトム化された対象、このちっぽけな一部分を、それが唯一の対象であるかのように、また、現われたかと思えば消えてゆく他の対象によって追跡されて次の瞬間にはあとかたもなく消失するものではないかのように、それをしっかりと受けとめねばならないのである。一人ぼっちのアトム化された人間、一人ぼっちのアトム化された対象……この両者がむかいあうのである。」

人間はこのような「孤絶の状況」を背負わねばならない。そこには「完全な孤独的存在のなかでの対象との協同以外には何もない。」人間はまるで「世界の発端に立たされた」かのようである。単独の人間と単独の事物。そこではあらゆる個々のものが唯一のものであった。「この世界の発端におけるように、そのとき、個々のものから、この切れっ端から、ふたたび全的なものが生じ得るのである。」[53]

Ⅲ、坂田徳男の「三公理」

最後にもう一度坂田徳男を取り上げよう。その略歴を示す。

坂田徳男

明治31（1898）年兵庫県生まれ。大正12年京都帝国大学医学部卒業。昭和５年京都帝国大学文学部哲学科卒業。大阪市立大学教授を勤めたのち帝塚山大学教授。昭和59（1984）年逝去。著書は、『性格学』『科学と哲学』『哲学への道』『近代と現代』『人間崩壊さなかの哲学』など多数。翻訳には、昭和７年日本初のカント『判断力批判』全訳本をはじめ、同『人間学』、ベルクソン『形而上学入門』、ピカート『神よりの逃走』など多数。論文はわかっているだけでも約200編。哲学は「単純、明解、透明」でなければならないとの考えの下、晩年は哲学論文を、話すように書くことを実践した。

(1)日本の問題を考えるための「三公理」

坂田は昭和28、9年頃、偶然、人から佐野利勝訳『われわれ自身のなかのヒトラー』を紹介された。大阪から京都へ帰宅する途中、電車の中でこれを一読、「全身に一大鉄槌を受けるほどの衝撃を感じ、殆ど小生の人生観を一変させるばかりの感銘を受けた」。ドイツについての自分の考え不足を自覚するとともに、「まず何よりもピカートが説いているアトム化から徹底的に学ぶことをおこたっては、他に何事を考えようとも、言おうとも悉くいわば空中楼閣におわるように思われた」[54] と書いている。

アトム化の現象を理解せずして、現代人を理解することはできない。アトム化は最も大きい鍵ではあるが、しかし、日本における問題は、アトム化だけでは割り切れないのではないか。坂田はそこには神道の問題、それにトインビーから学んだエンカウンターの問題を考慮に入れる必要があると考えた。坂田はこれら三つを、日本の現実を理解するための「三公理」と命名した。すなわち、ⅰ人間のアトム化、ⅱ神道の本性、ⅲエンカウンター（異質文明との邂逅）である。

神道とエンカウンター、これらもいずれも大きい問題であるが、残念ながら、十分取り上げることはできなかった。坂田の考えを『近代と現代』から、わずかに紹介するだけでとどめたい。

(2)これからの日本の「中心」

坂田によれば、「とっくの昔に vermassen し」、「さらに atomisieren」したのが現代人である。わが身を省みて、多くの人が納得するだろう。自らの内に、容易に「大衆化」、「アトム化」の徴候を見出だすことができるだろう。

モラル（道徳的規範）をもたない。権利は主張するが、義務は認めたくない。人の言うことに耳を貸さない。自分よりすぐれた審判を認めない。恩を忘れている。……目が絶えず外を向いている。集中力がない。時間のたつのが速い。常に齷齪（あくせく）している。来し方行く末を思うことがない。何が善く、何が正しいのかわからない。すぐに忘れてしまう。孤独な時間をもてない。忍耐力が欠如している。……「記憶を喪失した人間」、「刹那的人間」、「発展なき人間」……。

オルテガは「ヨーロッパを救いうる唯一のもの」は「真の哲学」と言った。「真の哲学」が誕生しても、現代の大衆、大衆人がそれを「自分よりもすぐれた審判」として受け取り、それに従わなければ何にもならない。しかし、それは彼らの最も嫌うところであろう。外部からの強引な働きかけ（たとえば第3次世界大戦の勃発、さらなる環境汚染、エネルギー資源の枯渇……？）がなければ、大衆は自分たちの能力の不十分さに気がつかないだろう。自分たちだけではやっていけないと、仮に認めることがあるとしても、再び少数者のリードを受け入れるようになる可能性については、オルテガはすこぶる悲観的である。

他方、＜預言者＞ピカートは、「救われる得る」と言う。アトム化の現象は「過度に明瞭」である。それは、「われわれがそれを見て、それによって戒慎するために」である。「これはわ

れわれに慰めをあたえる」。「アトム化の現象が、結末、終局に達したこと」を意味しているのである。「破滅にみちびかれるか、或いは回心」が目前にせまっている。人間は「神」なしに生きていくことはできない。いや、ピカートは「神」とは限定していなかった。人間は「中心」なしに生きていくことはできないということを知るだろう。そういう可能性はある、と。

さて、われわれ日本人において、この「中心」は何なのだろう。日本は果たして仏教国か？これは難しい問いである。坂田によれば、日本は仏教化していない。「神仏混合」、「神仏並存」の国である。坂田は、そこに、＜仏教＞に対する＜神道＞の勝利を見た。では、日本人の「中心」は＜神道＞なのか。今後も日本人は＜神道＞でやっていけるのか。

＜神道＞は原始的、自然的、種族的宗教である。種族的生命の表現であり、日本人の「自然性」である。それ自体は善いものでも悪いものでもない。日本人の多くは自分は無宗教であると言うが、その実、大の宗教家である。＜神道＞が日本人の生活全般を強力に支配している。たとえば、大学の研究室内の出来事で、教授を「神主」、助教授、講師を「禰宜」、学生を「氏子」と考えて、初めて理解できることがいくつもある。

坂田によれば、原始的宗教、＜神道＞は人間を底の底から改造できるものではない。人間に新たな生命を与える力はなく、われわれの真に深い要求に応じてくれるものでもない。日本人の「精神の飛躍」を押さえる魔力、妖力を発する源泉、それが神道である。日本人がこのような原始的宗教に踏みとどまっているかぎり、それ以上の宗教のことがわからない。多少とも高等な宗教に関係ある一切の事柄（当然、哲学も含まれる）もわからない。「科学、芸術は哲学でもつ、哲学は道徳でもつ、道徳は宗教でもつ」と言ってよいが、＜神道＞はそういう根底にはなりえない宗教なのである。

＜神道＞は先の敗戦でもろくも崩れた。しかし、原始的宗教は雑草のようなものである。崩れても、それに取って変わるものがなければ、また頭をもたげてくる。

では、現代日本人にどういう「中心」が可能なのか。今後のわれわれにとって必須の問である。坂田の「三公理」はまことに有難い道標だが、それでもなおこれは難問である。＜現代日本人の死生観＞を掘り下げることで、道が開けないか。筆者もそういう目論みは立ててみたものの、日暮れて道遠しの感が否めない。

注

1）坂田徳男／澤瀉久敬編『ベルグソン研究』勁草書房、1961年、309頁
2）桑名一博訳『オルテガ著作集２』白水社、1969年、53頁
3）前掲書111頁
4）前掲書60頁
5）前掲書62頁
6）前掲書102頁
7）豊田堯『市民革命の時代』講談社現代新書、1973年、４～５頁
8）前掲書103頁
9）前掲書103頁

10) 前掲書103頁
11) 前掲書105頁
12) 前掲書104頁
13) 前掲書110頁
14) 前掲書149頁
15) 前掲書151頁
16) 前掲書150頁
17) 前掲書105頁
18) 前掲書116頁
19) 前掲書111頁
20) 前掲書168頁
21) 前掲書249～251頁
22) 小林秀雄『作家の顔』角川文庫、1969年、76頁
23) 前掲書39頁
24) アンセルモ・マタイス／佐々木孝訳『ガリレオをめぐって』法政大学出版、1969年、107～108頁
25) 佐野利勝訳『われわれ自身のなかのヒトラー』みすず書房、1965年、22頁
26) 前掲書23頁
27) 前掲書23頁
28) 澤瀉久敬編『世界の名著ベルクソン』中央公論社、1969年、85頁
29) 前掲書24頁
30) 前掲書27頁
31) 前掲書57頁
32) 前掲書29頁
33) 前掲書31頁
34) 佐野利勝訳『騒音とアトム化の世界』みすず書房、1971年、137頁
35) 前掲書137頁
36) 前掲書138頁
37) 前掲書138頁
38) 前掲書138～139頁
39) 前掲書140頁
40) 前掲書144頁
41) 前掲書144頁
42) 前掲書145頁
43) 前掲書145頁
44) 前掲書146頁
45) 前掲書146頁
46) 前掲書160頁
47) 前掲書160頁
48) 前掲書162頁
49) 前掲書164頁
50) 前掲書165頁
51) 前掲書165頁
52) 前掲書166頁
53) 前掲書167頁
54) 坂田徳男『近代と現代』東京教学社、1975年、193頁

〔付記〕本研究は、奈良大学総合研究所より平成10年度研究助成を受けて行なったものの一部である。助成いただきましたこと、ここにあらためて御礼申し上げます。